

版画に見る
特別展 ジャポニスム
——アメリカ・ジマーリ美術館所蔵——



「アイリスの女」ジョルジュ・ボッティニーニ 多色刷石版画 1898年

1990年6月12日(火)―7月22日(月)

開館時間＝午前9時～午後5時(入館4時30分まで)

休館日＝6月18日(月)・25日(月)／7月2日(月)・8日(日)・9日(月)・16日(月)

入館料＝一般 個人 200(160)円 小・中学生 100(80)円

※()内は20人以上の団体割引料金

渋谷区立松濤美術館

渋谷区松濤2-14-14 TEL.465-9421 渋谷駅下車徒歩15分 神泉駅下車徒歩5分



「扇の模様のある壁紙のデザイン」
 ジュール=オーギュスト・アペール=ティス
 多色刷フォトレリーフ 1886年

アメリカ・ニュージャージー州にあるラトガース大学に設置されたJ. V. ジマリー美術館は国際ジャポニズム研究センターとして知られています。本展は、同館が所蔵するヨーロッパのジャポニズムの作品の中から、リトグラフ、エッチング、木版画などの版画作品を中心に、水彩画、パステル画、写真などのグラフィックアートに焦点を合わせて、19世紀後半に活躍したフランス人作家71人による154点の作品を紹介するものです。

〈主な出品作品〉

ミレー	ホイットスラー	シニヤック
ヨンキント	F. レガメー	H. リヴィエール
ピサロ	E. グラッセ	トゥルーズ=ロートレック
マネ	F. ビュオ	ヴィヤール
ジェームス・ティソ	ゴーガン	



「べた風」アンリ=リヴィエール 多色刷石版画 1902年

■講演会

6月23日(土) 午後2時～

「フランス世紀末とジャポニズム」

東京大学教授 高階秀爾

7月14日(土) 午後2時～

「ヨーロッパのグラフィックアートと浮世絵」

青山学院短期大学助教授 馬淵明子

■映画会

6月17日(日) 午後2時～3時

印象派1/ マネ・ブーダン(毎日世界美術館)

印象派2/ モネ(毎日世界美術館)

7月15日(日) 午後2時～3時

印象派3/ ピサロ・シスレー(毎日世界美術館)

印象派4/ ドガ・ルノワール(毎日世界美術館)

■美術相談

6月24日(日) 午後1～4時

講師 遠藤原三(洋画) 宮田翁輔(洋画)

7月1日(日) 午後1～4時

講師 西嶋俊親(洋画) 荒井朝吉(日本画)

19世紀中葉から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは、産業革命の進展、中産階級の台頭など社会の激しい変化に対応して、印象派、後期印象派、アールヌーボーなど新しい様式を掲げた美術運動が次々と興りました。旧来の伝統的なモチーフ、様式にあきたりず新しい芸術を模索していた画家や美術家達の中から、当時、商品として、あるいは万国博覧会を通してヨーロッパに大量に輸入され始めていた日本の美術工芸品の新鮮な美しさに驚き、日本美術に深く心酔する人々が多く現れました。彼らは日本美術の持つ平明さ、大胆さ、繊細さ、装飾性に新たな芸術創造の活路を求めたのでした。フランスの美術批評家ビュルティによって“ジャポニズム”と命名されたこの日本文化に対する強い関心とその受容は深く静かにヨーロッパ社会に浸透したのです。

当時のヨーロッパ社会では、交通、商業の発達、文化の大衆化などにより、ポスター、カレンダー、印刷物や雑誌の装丁、挿し絵、室内装飾などのグラフィック・アートに対する需要が急速に増大しました。これらのグラフィック作品制作に積極的にかかわったアーティスト達は、当時、彼らを魅惑していた日本の美術工芸品の中でもとりわけ浮世絵の持つ斬新な非対象の構図、明るく強い色面、抑揚のある精緻な線、写実的であると同時に大胆に単純化されたモチーフ、などの諸特質に強く影響され、それらを摂取、応用して独自の新しい作品を生みだしていきました。



「波」アンリ=ギュスターブ・ジョソ
 石版画 1894年

